【書評】「〈悲〉の接触・変性と〈空〉＝ケノーシスの可能性と－大乗仏教とユダヤ＝キリスト教神学を架橋できるか」『図書新聞』3402号　2019年6月8日

〈悲〉の接触・変性と〈空〉＝ケノーシスの可能性と

大乗仏教とユダヤ＝キリスト教神学を架橋できるか

稲賀繁美

書評

▼大橋良介著『共生のパトス──コンパシオーン（悲）の現象学』18・7・31刊、四六判五四二頁・本体九〇〇〇円・こぶし書房

評者は数年前に『接触造形論』を上梓した。そこで門外漢ゆえ不十分ながら見出した幾多の論点に、本書では遥かにより周到かつ徹底した検討が加えられている。以下この点に限定集中して論評し、著者および読者からのご教示を得る契機としたい。

異文化対話はえてして自己満足な自己確認に終わりがちだ。だが接触はそこに関与する主体を変質させ、自己変容の契機をなす。「触れる」とは受動でも能動でもなく、いわば中動態であり、その成就には超越的権威が宿る。ヨハネ福音書で復活のキリストが語るnori me tangereは長らく「我に触れるな」と訳されてきた。だがギリシア語のhaptôに戻るだけでも、これは誤訳ではなかったか、と著者は問う。「触れる」ではなく「摑む」に近い語感であり、とすればイエスはマグダラのマリアに汝の手を放せと命じたことになる。この段階でイエスはもはや死体ではないが、なお昇天は遂げていない。肉でも霊でもない「中間状態」にある。「肉」としての彼を素手で確かめたいという欲望は、もはや放棄されねばならない。だが霊としての救世主を信仰するための条件はまだ整っていない。イエスはいわば非現前の位格で現前している。ここで著者は『維摩経』を想起する。維摩を見舞いに来た文殊は「不来の相」で出現し、これを迎える維摩は「不見の相」にある。ここに著者は大乗仏教の「空」そして「悲」がキリスト教と通底する可能性を垣間見る。

共生のパトス
Pathos des Miteinanders
コンパシオーン（悲）の現象学
Phänomenologie der Compassion
大橋良介 著
Ryosuke Ohashi
「共通感覚」の
新たな地平を開示する
こぶし書房

これだけではまだ飛躍した印象は免れまい。だがここにパウロ福音書に頻出する概念、kenosisを接ぎ木するとどうだろうか。ケノーシスはドイツ語ではEntleerungなどと訳される。カトリック的な解釈であれば、イエズスは地上に降臨し十字架の磔刑という自己犠牲によって世界に神の意思を成就させた。「神の子」が、己が身を空しくすること──。それが神の意思の器となるための条件だった。プロテスタント的な解釈ならば、信者の自己放棄を通して神の意思が信仰として成立する。物理学に専門的な知識をもつ田邊元は、仏教起源の「空」を相対性理論と対峙させている。著者の議論からやや逸脱するが、その田邊は晩年、軽井沢に隠居し、『ヴァレリイの藝術哲学』（１９５１）で「若きパルク」を読み解き、「無即愛」の観念を省察する。フランス詩人はギリシア神話の運命の女神を題材としており、田邊の「愛」も、直接キリスト教神学に深入りするものではない。だが、イエスが自らの神性を自己否定することが、世界の救済と人類の贖罪の条件だったとする基本的な理解は、田邊の「無即愛」の理解を妨げはせず、むしろ論点を鮮明にする。

その田邊の学統を継ぐ西谷啓治は晩年の「宗教とは何か」（１９６１）で神の愛agapeを「空」や「無我」Entleerungに結びつける。西谷著の現行ドイツ語訳では、Selbstäußerung, Sich-Entäußerungなどが当てられている。だが大橋によればここで西谷はほぼマイスター・エックハルトの教説をそのまま敷衍しており、「空」に対応する原語はAbgeschiedenheitだった。ハイデガーも田邊と同時期（１９５１）にエックハルトを取り上げてGelassenheitを論じており、これは日本語訳では禅語の「放下（ほうげ）」を利用して「放下（ほうか）」と訓じられもした。西谷はさらに中国語の禅語に由来する「無」を「宗教とは何か」と同時期に、サンスクリット由来の「空」に置き換える作業にも勤しんでいた。

愛即空？

ここでひとつ素朴な疑問がわく。そもそも無限であるはずの神の愛。それを、有限でちっぽけな容量しかもたない人類は、いかにそっくり受けとることなどできるのか。この議論に大橋はハンス・ヨナース経由で、ユダヤ教のタルムードに言うZimzumの概念を動員する。ここでも評者の流儀で敷衍したいが、「収縮」を意味するZimzumは、ユダヤ教のカバラーの解釈によれば、無限の神がこの世を創造するにあたって、自らの光を満たす余地を作るために退却した「収縮」を意味する。創世記の「光あれ」の場面だろうが、この神の無限の光を受けた器の多くは、その無限の強烈さに耐えきれず破砕する。こうして散乱した容器の残骸破片を接ぎ合わせる復旧作業を通じてはじめて、人類は神の創造の御業にまねぶことができる。大橋も的確に指摘するとおり、エマニュエル・レヴィナスは『全体性と無限』（１９６５）で「無限者は、ある収縮のなかで全体性への横溢を断念することによって性起を遂げ、分離した存在者に場所を与える」（拙訳：注３３７）と述べるが、これがZimzumの、それ自体極度に縮約された表現であることは、一目瞭然だろう。

ここにはすでにイエズスによるkenosisの予兆typologyとして神の創造を理解する道が準備されているが、大橋はこの始原における「神の収縮」Kenosis Gottesという自己規制、有限への退却のうちに、大乗仏教でいう「大悲」に通じる神学的理念を見る。そしてこの仏教術語の標準的な独訳学術語が、大橋の用いるCompassionに他ならない。

はたしてこうした翻訳による意味の「遷移」はどこまで共約性を保証されるのだろうか。そして共約性なる術語は、いかなる接触変性を許容するのか。その考察にはまた場所を改めたい。だが一言補おう。ヴァルター・ベンヤミンの翻訳論がカバラーのZimzumを下敷きにしており、ジャック・デリダがそれに注釈を付した「バベルの塔」で「塔」を複数に増幅したことは、無視できまい。創造の瞬間、神の言葉は破砕した断片のうちに刻印されるほかなく、複数の言語（未完の塔）は相互照射によって、始原の喪失を虚空のうちに復元する以外の手段を持ちえない。それが一神教の風土の翻訳論の一端を担う思想だった。苟（いやしく）も仏教とユダヤ・キリスト教との哲学対話が可能だとすれば、そこには初期条件として、原初のkenosis／空の〈大悲〉との触が不可触な条件となる。『共生のパトス』はそこからいかに〈悲〉を現象させてゆくか。それは今後の課題だろう。

（国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学教授）